伝われ！
私たちのぱらぐ愛

私たちが見た パラグアイ

実践授業報告記事、私たちが考えた2つのワーク、報告書、報告動画は、
以下のサイトからご覧いただけます。
https://www.jica.go.jp/domestic/yokohama/activities/kaihatsu/kaigaikenshu/1578726_64299.html

制作：2025年度JICA横浜教師海外研修参加者

2025年度JICA横浜教師海外研修参加者

パラグアイ簡単紹介

私たちは

Hola(オラ)！「パラグアイ」と聞いて、皆さんはどんな国を想像しますか？私たちは2025年度、JICAの海外研修に参加し、多文化共生について学ぶため、2週間という短い期間でしたが、パラグアイを訪れました。

限られた時間の中では、この国の全てを知ることはできませんでした。しかし、パラグアイの多様な文化や人々と触れ合ううちに、私たちはこの国のことがどんどん好きになっていきました。

私たちが現地で見て、肌で感じたパラグアイの魅力を少しでも皆さんに伝えられるように、これからパラグアイの様子を紹介していきたいと思います。

パラグアイについて

場所 南アメリカ大陸の内陸国

首都 アスンシオン

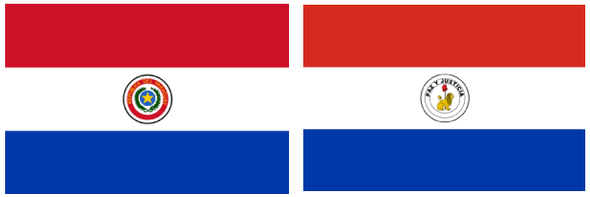
公用語

スペイン語 と グアラニー語二言語が同じくらい使われる珍しい国で、Jopara(ジョパラ:グアラニー語とスペイン語が混ざった日常会話の言語形態)がパラグアイ全土で広く使われている。

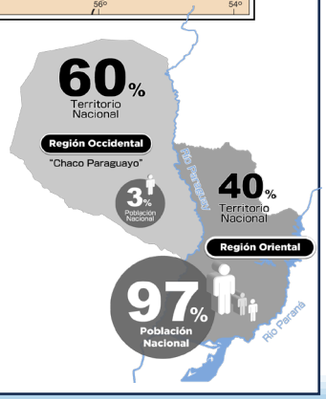
人口 約684万人(2023年世銀調査)

通貨 グアラニー

国旗の秘密



パラグアイの国旗は、表と裏で異なる世界でも珍しい国旗です。正義の赤、平和の白、自由の青の三色を基調とし、表には国章、裏には「平和と正義」の文字と自由の象徴であるフリジア帽が描かれています。



パラグアイの歴史

1. 昔から暮らす人々、グアラニー族

パラグアイには、昔からグアラニー族という先住民が暮らしています。彼らの言葉や文化は、今のパラグアイの国の土台になっています。パラグアイは、このグアラニー族の文化が今もとても大切にされている、珍しい国なんです。

2. スペインとの関係と独立

16世紀になると、スペインがパラグアイを支配するようになり、植民地になりました。でも、パラグアイは自分たちの国を取り戻すために立ち上がり、1811年に独立を達成しました。

3. 悲しい戦争と国の衰退

19世紀には、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイの3つの国と大きな戦争(三国同盟戦争)が起こりました。この戦争で、パラグアイはたくさんの人々を失い、国はとても弱くなってしまいました。これは、パラグアイの歴史の中でも特に悲しい出来事として知られています。

4. 新しい国づくりと移民

20世紀に入り、パラグアイは農業をもっと発展させるために、たくさんの国から人々を迎え入れました。これを移民といいます。この時、遠い日本からも多くの人々がパラグアイに移り住み、新しい生活を始めました。彼らが力を合わせて、今のパラグアイの農業を支えることになりました。

分かち“愛”を大切にするパラグアイ人

パラグアイの国民性：共有とゆとりの精神 パラグアイの人々を語る上で欠かせないのは、その「圧倒的な親しみやすさ」です。

街にあふれる「オラ！」の挨拶

パラグアイの街を歩けば、見知らぬ人からも「オラ！（やあ！）」と気さくに声がかかります。時には走行中の車から笑顔で挨拶を投げかけられることもあるほどです。彼らにとって挨拶は、相手の存在を認め、敬意を払うための大切なコミュニケーションの第一歩なのです。

「パラグアイ・タイム」に宿るおおらかさ

一方で、パラグアイの人々は時間に非常に寛容です。いわゆる「パラグアイ・タイム」と呼ばれる独自の感覚があり、約束の時間に少し遅れることは日常茶飯事です。しかし、これは「だらしない」のではなく、彼らなりの「ゆとりと心の広さ（おおらかさ）」の表れでもあります。

「テレレ」が象徴する分かち合いの文化

パラグアイを象徴する飲み物「テレレ（冷製マテ茶）」の習慣には、彼らの精神性が凝縮されています。一つの回し飲み用カップ（グアンパ）を共有し、車座になって語り合います。この「一つのものを分かち“愛”」という文化こそが、他者への優しさや、コミュニティを大切にするパラグアイ人のアイデンティティとなっているのです。

↓イタイプダム

産業について

パラグアイは**農業国**で、大豆、とうもろこし、牛肉が主要な生産品です。特に大豆は世界有数の輸出品となっており、国の経済を支える重要な基盤となっています。

また、**水力発電大国**でもあり、世界最大級の**イタイプダム**などによって、国内の電力需要を大きく上回る電力を生み出しています。余った電力は、ブラジルやアルゼンチンに輸出されています。

工業はまだ発展途上ですが、自動車部品産業や食品加工業を中心に成長を見せています。さらに、首都のアスンシオン市は、観光資源としても注目されており、観光業やサービス業も拡大しています。

自然について

パラグアイの2つの地域

パラグアイは、東と西でまったくちがう景色が見られます。

東部地域：人口が多く、緑豊かな森や丘が広がっています。大豆畑や牧場がたくさんあり、農業が国の経済を支えています。

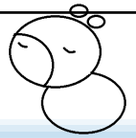
西部地域（チャコ地域）：乾燥していて、住んでいる人は少なめです。サバンナや湿地、砂漠のような風景が広がっていて、ジャガーやアルマジロ、カピバラといった珍しい野生動物たちが暮らしています。

パラグアイの気候と水資源

気候：パラグアイは、日本の夏のように暑くてジメジメする「温暖湿潤気候」～「亜熱帯性気候」です。夏には気温が40℃近くまで上がることもあります。雨がたくさん降る時期と、あまり降らない時期（乾季）に分かれています。

水資源：パラグアイ川やパラナ川といった大きな川がたくさん流れています。これらの川のおかげで、水力発電がとてもさかんです。なかでも、**イタイプダム**は世界でも最大級の水力発電所で、パラグアイで使われる電気のほとんどをまかなっています。そして、余った電気はまわりの国に売っています。

パラグアイでは、許可なく木をきることは禁止されるくらい、自然を大切にしているんだよ



パラグアイの文化

パラグアイでは、アルパ(ハープ)音楽やポルカが盛んであり、民族音楽や舞踊の重要な要素となっています。ニャンドゥティレースやアオ・ポイといった伝統工芸品が伝わる一方で、ソパ・パラグアージャやチパといった独特の料理が楽しめ、サッカーは国民的スポーツとして親しまれています。

アサード

パラグアイでは、週末になると家族や友だちが集まり、一緒にバーベキューを楽しむ文化があります。これは「アサード」と呼ばれ、パラグアイの人々にとって欠かせない大切な時間です。アサードはただの食事ではなく、大切な人たちとのつながりを深めるための特別なイベントです。多くの家庭の庭には、専用の窯が設置されていて、そこでお肉をじっくりと焼きます。おいしいお肉を囲んで、おしゃべりを楽しみながら過ごすアサードは、パラグアイの人々がどれだけ家族や仲間との絆を大切にしているかを示しています。

テレレ

「テレレ」は、冷たい水で作るパラグアイの伝統的なマテ茶の飲み方です。マテ茶葉を「グアンパ」と呼ばれるカップに入れ、冷水を注ぎ、「ボンビージャ」という特別なストローで飲みます。

「テレレ」は、身近な人と飲み物を「共有する」ことを通じて信頼や友好を深めるパラグアイの伝統文化であり、2020年にはユネスコの無形文化遺産(代表リスト)に登録されています。その登録理由には、テレレの準備や飲用の時間と空間が「包摂、友情、対話、尊重、連帯」を促進するコミュニティの結束を育む儀式であるという点が評価されています。

ニャンドゥティ

「ニャンドゥティ」は、パラグアイに伝わる伝統的なレース編みの工芸品です。その名前は、先住民の言葉であるグアラニー語で「クモの巣」という意味。まるで本物のクモの巣のように、細い糸で繊細な模様が作られることから名付けられました。この工芸品の特徴は、まるでクモの巣のように中心から放射状に広がる、幾何学模様や美しい花柄のデザインです。細い糸を使い、布地に一針一針ていねいに刺しゅうを施していくことで作られます。 ニャンドゥティの色や柄は、地域によって少しずつ違うのも面白いところ。作る人や場所によって、それぞれ個性的な作品が生まれる、パラグアイの誇るべき伝統文化の一つです。

ボトルダンス

パラグアイに伝わる伝統的な踊りには、とてもユニークなものがあります。それは、女性たちが頭の上にワインボトルを乗せて踊るという、驚きの舞踊です。最初は1本から始まり、少しずつボトルを積み上げていきます。ボトルが不安定に揺れるたびに、見ている人はハラハラしますが、すべてのボトルを乗せきって優雅に踊る姿は、見る人を感動させ、大きな拍手で包まれます。この踊りは、バランス感覚だけでなく、強い精神力と集中力も必要とします。パラグアイの人々が受け継いできた、伝統と技が光る素晴らしいパフォーマンスです。

現地小学校を訪問しました

教えてパラグアイ！

※令和7年7月30日（水）に1109小学校（パラグアイ現地校）に訪問し、5年生を対象に質問した内容をまとめたものです。

Q1　日本のことは知ってる？

日本のアニメはよく知っているよ。ドラえもん、クレヨンしんちゃん、鬼滅の刃、ナルトなどは、みんな知っているよ。ジブリのアニメを見る人もいるよ。ゲームでは、スーパーマリオもみんな知っている。

Q2　普段は何をして遊ぶの？

学校の休み時間は、ドッジボール、サッカーが多いかな。放課後はゲームをしている子が多いよ。マリオ、スプラトゥーン、マイクラ、ロブロックスが人気だよ。

Q3　どんなスポーツが人気？

サッカーが一番！！

Q4　将来の夢はなに？

建築家、メイクアップアーティスト、幼稚園の先生、料理人　・・・。まだ決まっていないと答える子が多かったです。

友情の日

Happy International Friendship Day

私たちが訪れた7月30日は友情の日（国際友情デー）でした。これは2011年に国連に対してパラグアイ政府が「友達の大切さを世界に広めたい！」と提案して認められた日です。

ドキドキが止まらない！

「友情の日」の特別なプレゼント交換

今日は、毎年恒例の「友情の日」。このクラスで行われたプレゼント交換会は、少し変わったルールで大盛り上がりでした。それは、友達の「特徴」をクイズのように発表し、自分だと思った子が前に出てくるという、ドキドキの指名形式です。

まず先生が「髪が短くて、サッカーが得意な人！」と声を上げると、教室に緊張が走ります。「自分かな？」と思った子が前に出ると、大きな拍手で最初のプレゼントが手渡されました。 プレゼントを受け取った子は、次に渡す相手の特徴を自分で考え、発表します。「いつも本を読んでいて、算数が得意な人！」 こうして、自分のことを見てもらえている喜びを感じながら、子どもたちは次々と前に出てきます。先生が笑顔の瞬間を逃さず写真を撮る中、この温かいリレーは、一度も同じ子がかぶることなくクラス全員につながりました。どの子も心から嬉しそうな表情を浮かべていました。

感動的なプレゼントリレーの後は、みんなが心待ちにしていた「お菓子の分かち合いタイム」です。それぞれが持ち寄ったお菓子がテーブルに並び、先生が「どうぞ！」と合図を出すのを子どもたちは今か今かと待っていました。合図と同時に、わいわいと賑やかな声が上がり、お菓子はあっという間にみんなのお腹の中に消えていきました。

言葉と笑顔、そして甘いお菓子で、みんなの絆が深まった、素敵な「友情の日」となりました。

グアラニー族

グアラニー族って？

グアラニー族は、パラグアイ、ブラジル南部、アルゼンチン北東部を中心に暮らしてきた先住民族で、現在のパラグアイ社会にもっとも強い影響を与えている民族です。彼らは古くから森林地帯に居住し、狩猟・採集と焼畑農業を組み合わせた生活を営んできました。自然との調和を重視し、精霊や祖先と深く結びついた世界観を持って暮らしていた点も大きな特徴です。

16世紀にスペイン人が到来すると、グアラニー族はキリスト教宣教師によって組織された「レドゥクシオン」と呼ばれる共同体に再編されました。イエズス会は教育や農業、建築、音楽など多くの技術を伝え、グアラニー社会はそれらを取り入れながら新しい生活モデルを築いていきました。一方で、移動の制限や外部支配といった側面も存在していました。

現代のパラグアイでは、国民の多くがグアラニーの文化を受け継ぎ、価値観・言語が国家アイデンティティの中心となっています。都市部でもグアラニー語が日常的に使われるなど、先住民族文化が社会全体に深く根づいていることが特徴です。

グアラニー語紹介

グアラニー語は、パラグアイでスペイン語とならんで使われている大切な言語です。先住民族のことばなのに、今では国の多くの人が毎日の生活でふつうに使っている、世界でもめずらしい言語です。

グアラニー語には、鼻で出す音や気持ちをあらわす言葉が多く、聞くとやさしい音のひびきがします。また、スペイン語とまざって使われる「ジョパラ」という話し方もあり、町では二つの言語を自然に使い分けて会話する人がたくさんいます。

おもしろいのは、「私たち」をあらわす“Ñande”という言葉に、相手をふくむ場合とふくまない場合の二つがあることです。人とのつながりを大切にする心が、言葉の中にもあらわれています。

「Aguyje（ありがとう）」「Karai（えらい人）」など、ていねいな気もちを伝える言葉も多く、グアラニー語は自然や気持ちと深くむすびついた、“心のことば”としてパラグアイの文化を支えています。

グアラニー豆知識

① パラグアイの通貨名も “グアラニー”
国の公用語に名を残すグアラニー語だが、実は通貨の名称にもなっています。
② 言語混合 “Jopará（ジョパラ）” が当たり前
多くのパラグアイ人は、スペイン語とグアラニー語をその場・相手・目的によって自由に使い分け、時には混ぜて話します。たとえば道での挨拶はグアラニー語、その後スペイン語に切り替え— というように、バイリンガル／コードスイッチはごく自然に行われることも。

トリニダー遺跡（La Santísima Trinidad de Paraná）

トリニダー遺跡は、17～18世紀にイエズス会の宣教師たちが築いた先住民ミッションで、グアラニー族が外部の支配や圧力から守られながら共同生活を送っていた重要な場所です。宣教師たちは、キリスト教の布教だけでなく、教育、農業、畜産、建築、音楽など多様な技術を教え、グアラニー族はそれらを取り入れながら自給自足の生活を営んでいました。

こうした共同体は総称して「レドゥクシオン」と呼ばれ、スペイン植民地社会からの保護とキリスト教化という二重の目的を持っていました。17世紀半ばまでに約30のレドゥクシオンが形成され、最大で15万人もの人々が暮らしていたと考えられています。レドゥクシオンは、先住民の生活を守りつつ、新しい社会モデルを築く場として大きな役割を果たしました。

しかし、イエズス会の影響力が強まるにつれ、スペインやポルトガルは次第に警戒心を高め、軍事的圧力を加えるようになります。侵攻により共同体が放棄された地域も多く、1767年の「イエズス会追放令」によって宣教師たちは南アメリカ全域から追放されました。それに伴い、多くのレドゥクシオンは崩壊し、住民たちは散り散りになっていきました。

現在のトリニダー遺跡には、当時の生活を物語る石造りの聖堂、回廊、学校跡などが残されており、先住民とヨーロッパ文化の融合を示す貴重な文化遺産として保全されています。こうした遺構を通して、グアラニー族が築いた共同生活のあり方や、イエズス会と先住民の協働による独自の社会の姿を知ることができます。

食べ物紹介

キャッサバ

あなたの飲んでいるタピオカ、実はパラグアイの主食と同じなんです！日本で人気の「タピオカ」の原料は、実はキャッサバというお芋です。パラグアイではこれを「マンディオカ」と呼び、毎日欠かさず食卓に並ぶ国民的な食材です。キャッサバはそのまま食べるだけでなく、デンプン（タピオカ粉）に加工されることで、様々な伝統料理に姿を変えます

牛肉

パラグアイは、人口約684万人（2023年世銀調査）に対し、その2倍以上となる約1,300万頭もの牛が飼育されている世界有数の畜産国家です。牛肉の輸出量は世界第10位（2022年）を誇り、まさに世界の食卓を支える重要な拠点となっています。この国において、牛肉は単なる輸出品ではありません。古くから『アサード』と呼ばれるBBQ文化が深く根付いており、週末になれば家族や友人が囲炉裏を囲んで親睦を深めます。

学校給食が変える子どもたちの未来

～パラグアイの「飢餓ゼロ～への挑戦

パラグアイの一部の学校では、子どもたちの健やかな成長を支えるための「給食制度」が実施されています。

この取り組みは、まず支援を必要とする貧困地区からスタートしました。教育科学省と農牧省がタッグを組み、地元の農産物を活かした「栄養バランスの取れた食事」を完全無料で提供しています。

実は、この給食が子どもたちを学校へ惹きつける大きなきっかけにもなっています。「おいしいごはんが食べられるから学校へ行こう！」――そんな純粋な動機が、結果として就学率の向上や教育の機会創出につながっています。お腹を満たすだけでなく、未来への希望も育む。パラグアイの「飢餓ゼロプロジェクト」は、今日も子どもたちの笑顔を支えています。

チパ

パラグアイで最も愛されている伝統的なパンです。原料は小麦粉ではなく、キャッサバ芋から作られる「タピオカ粉」。そこにたっぷりのチーズ、卵、アニス（香辛料）を練り込んで焼き上げます。外はカリッと、中はもちもちとした独特の食感が特徴で、コーヒーやマテ茶との相性も抜群です。

ボリボリ

鶏肉の出汁が効いたスープに、トウモロコシ粉とチーズを丸めて作った団子（ボリ）がゴロゴロ入った、栄養満点の家庭料理です。「ボリボリ」とはグアラニー語で「玉」を意味します。2023年には世界的なグルメサイトで「世界一のスープ」に選ばれたこともあるほど、その濃厚で優しい味わいは一度食べたら忘れられません。

ソパパラグアージャ

世界で唯一の「固形スープ」！？ 直訳すると「パラグアイのスープ」ですが、正体はトウモロコシとチーズのしっとりしたケーキ。スープを煮詰めすぎたという失敗から生まれた逸話もあり、アサード（BBQ）には欠かせない名脇役です。

移民（移住者）

歴史的背景

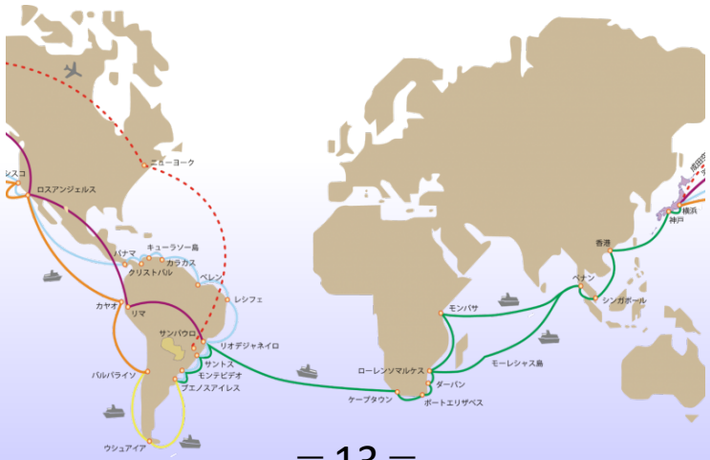
■ 1936年: 最初の日本人移住
1936年5月15日、パラグアイ初の日本人移住地ラ・コルメナに、約100家族が入植しました。南米各地で排日運動や移民制限が進む中、外国移民を積極的に受け入れていたパラグアイは、日本にとって新たな移住先として注目されていました。

■ 開拓の実態:熱帯での厳しい農業開拓
移住者たちは原生林を伐採し、農地を一から切り開きながら生活を築きました。農業経験の少なさに加え、マラリアや高温多湿の気候にも苦しめられました。

■ 戦争と中断、そして再開
第二次世界大戦中は日パ国交が断絶され、移住は一時中断されました。戦後の1954年に移住が再開され、1959年には公式な移住協定が結ばれました。

■ 新たな移住地の拡大
1960～70年代にかけて、ラ・コルメナに続き、ラ・パスやピラポなどの移住地が次々と開設されました。

■ 日系人の現在
2020年代現在、パラグアイには日本国籍者とその子孫を含め、約1万人規模の日系社会が形成されています。



JICA横浜 海外移住資料館

日本人の海外移住の歴史や日系社会の歩みを展示する資料館で、写真・資料・証言映像を通じて移住者の経験と多文化共生の軌跡を伝えている。

日系パラグアイ アイデンティティセンター
(エンカルナシオン日本人会の敷地内)

日本人移住の歴史や個人の証言を保存・公開するセンターで、写真やドキュメンタリーなどを通じて日系社会の記憶を伝えている。

引き継がれる日本文化

パラグアイの日系社会を訪れる中で、日本に暮らしていると気づきにくい「日本文化の姿」が、生活のさまざまな場面で形として現れていました。

○学校現場に生きる日本文化

NIHON GAKKOや日本語学校では、時間を守る姿勢や丁寧な挨拶、児童生徒自身が掃除を行う姿など、日本の学校文化が日常の中に自然に根づいていました。校内の日本語の標語や掲示からも、教育を通して日本の価値観が受け継がれていることを実感しました。

○地域行事に息づく伝統

餅つき交流会では、杵と臼を使った昔ながらの餅つきが行われ、山形の郷土食「納豆餅」が1世から4世へと受け継がれている様子が見られました。日本人会主催行事の円滑な運営や丁寧なおもてなしにも、日本らしい心遣いが伝わってきました。

○家庭に残る食文化

ホームステイ先では、ご飯や味噌汁とともにチパが並ぶ、日パ文化が融合した食卓に迎えられました。アサドの場面でも、日本の味つけや惣菜が自然に添えられ、家庭の食文化の中に日本の要素が息づいていることを感じました。

○日本語学習に込められた思い

日本語学校では、子どもたちがひらがなや漢字を学び、日本昔ばなしを暗唱する姿が見られました。日本語は「日本が好き」「日本に行きたい」という思いと結びつき、アイデンティティやルーツにつながる大切な学びとして位置づけられていました。

○日本とパラグアイの文化が交わる場面

テレレを回し飲みしながら日本語とスペイン語で会話する光景や、日本の行事にパラグアイの料理や音楽が溶け込む場面が多く見られました。こうした調和は、ルーツを大切にしながら多文化を受け入れてきた日系社会の歴史を象徴しているように感じられました。

日本語学校に通う小中学生にきいてみた

エンカルナシオン日本語学校

イタプア県にあるエンカルナルシオン日本語学校は、パラグアイに移住してきた日本人、日系人によって運営されている日本語を学ぶための学校です。幼稚園から中学校までの子どもたちが学んでいます。日本語だけでなく、運動会、七夕、ひな祭り、夏祭りなどの、日本の行事や文化を楽しみながら受け継いでいます。

ダブルライフをこなす毎日

午前 早く起き、パラグアイの学校へ。7:00から授業を開始。

午後 12:00頃に帰宅し、自宅で昼食。

夕方 週3回は16:00から日本語学校へ。

日本語学校がない日には習い事や趣味に打ち込む

ランドセルって使ってるの？

日本の「ランドセル」を使っている子はおらず、リュックやキャスター付きのバッグを使っています。

日本について

「日本の印象はきれいな国」や「食べ物、景色がどれもすごい」などとても好印象です。他にも、日本のアニメなどを見ているようです。さらに、「日本に行ってみたい！」と思う子が多くいるようで、将来の夢に「日本の大学で勉強したい」と書く子もいました。

ラパス移住地の暮らし

ラパス日本語学校

ラパス日本語学校では、幼稚園から中学校までの子どもたちが日本語や日本文化を学んでいます。学校の隣にあるラパス農業協同組合に校外学習に行ったり、日本人会と合同で餅つき交流会を行ったりしています。

日系人の食事

右の写真は、ラパスに住むある日系人家庭の朝食です。納豆やみそ汁、白菜の漬物など和食が並びます。ラパスはパラグアイ日系移住地における「大豆生産発祥の地」で、大豆の栽培が盛んです。近くの日系スーパーで納豆や豆腐が売られています。

ラパス農業協同組合

ラパス農協共同組合は、1970年に設立され、パラグアイの農業発展に寄与して来ました。2003年には小麦製粉工場が完成し、大豆と共に小麦がラパスの農業経済を支えています。

日系人にインタビュー

後藤（ごとう）　吉雅（よしまさ）さん　日系1世

ラパス日本人会会長
ラパス農協　元組合長

広島出身。1957年にラパスへ入植。
入植時は7歳であった。

入植当時の状況はどのような状況でしたか？

後藤さんは、７歳のとき広島県からラパス地区に移住しました。当時のそこはまだジャングルで、入植した頃、川にはたくさん魚がいたり、家の周辺にはいろいろな鳥や獣がたくさんいたりしたそうです。一家はトウモロコシ、綿、ツング（油を取るための植物）など様々な農作物生産にチャレンジしてきました。後藤さんは家の仕事を手伝うために、小学校を最後まで通うことができませんでした。２０才の頃、日本の商社の農業指導員となり、カイコの飼育指導の仕事を経験しました。いつも「どうすれば無駄なく仕事を進められるか」を現場で必死に考え、学び続けたそうです。その後、一時、畑の仕事に戻りますが、一年後ラパス農協の職員となり、１７年間勤務した後、役員となりました。

ラパス農協ではどのような取り組みをしましたか？

現在、ラパス地区は大豆と小麦の生産によって、安定的な農業経営を実現しています。ラパス農協は、金融事業（農家に必要なお金を貸し付けること）、製粉工場やサイロ（穀物を貯める施設）、スーパーマーケット、ガソリンスタンドの経営など、町の基盤となる事業を行っています。後藤さんは組合長として、仲間とともにその全てに関わりました。常に「組合員のみんなが安全に、安心して農業ができること」を一番に考えて行動してきました。

思いを語ってください！

「私には思いがある。私がパラグアイに来た頃、豊かな土地の恵みを受けて、パラグアイの人々のくらしは豊かだった。しかし、後から来た人たちが、ジャングルを開拓し裕福になっている。取り残されているパラグアイ人が少なくない。このままでは、後から来た人たちとパラグアイ人との確執が生じる。自分にできる分かち合いの方法は、“雇用を生み出すこと”。そんな思いもあって農協の事業拡大に努力してきた。“社会のために何ができるか”が大事ではないか。といつも考えている。」と思いを語ってくれました。

菊池（きくち）　塊人（かいと）さん　日系3世

エンカルナシオン青年部長（大学生）

青年たちによる日系人のコミュニティーをまとめる、熱い青年。

パラグアイで日本語を学ぶことついてどう考えていますか？

大学生の菊池さんは、パラグアイで暮らしながら日本語をとても大切にしています。子どものころ、もっと高いレベルの日本語を身につけるために、毎週末、車でおばあちゃんの住む「ピラポ」という町の日本語学校まで通い続けました。日本の教科書を使い、漢字の練習や言葉の意味調べを地道に続けた経験が、今の彼の自信になっています。特に「相手を思いやって言葉を選ぶ」という日本の敬語（尊敬語や謙譲語）に魅力を感じており、日本語ができることで日本の本を読んだり、世界中の情報に触れたりできる今の環境を、とても恵まれた宝物だと考えています。

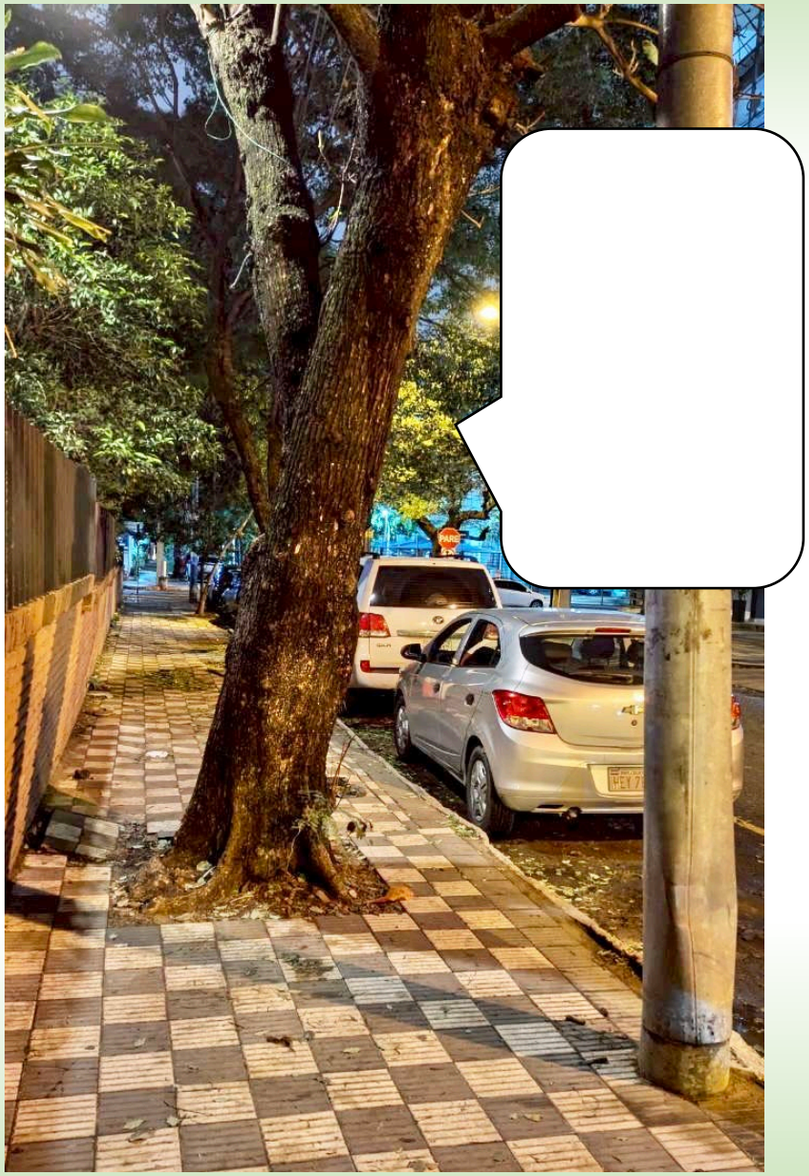
日本離れについてどう感じていますか？

菊池さんは、日系コミュニティの一員であることを、自分を支えてくれる大きな誇りに感じています。しかし最近では、同じ世代の若者たちがコミュニティから離れていってしまうという悩みも抱えています。この問題はパラグアイだけでなく、ブラジルやペルーなど他の国でも起きていることを、日系社会の国際的な集まりである「コパニー（COPANI）」での交流を通じて知りました。自分たちのルーツを大切にするという思いは、今や国境を越えてつながる大きな力になっています。

思いを語ってください！

今の日本語学校や日本人会は、かつて日本から海を渡ってきたおじいちゃんたちがゼロから作り、お父さんたちが守り続けてきた大切な場所です。菊池さんは、その歴史に感謝しながら、この場所を「ただ守るだけの場所」ではなく、新しい世代が育っていく「可能性が詰まった場所」にしたいと考えています。先人が築いてくれた土台を活かしながら、次の時代を担う仲間たちを増やしていくことが、青年部長としての彼の大きな目標です。

考えてみよう



気になる木

あなたはパラグアイの道端を歩いていたら写真の木に出会いました。この木はどんなことをつぶやくのだろう？

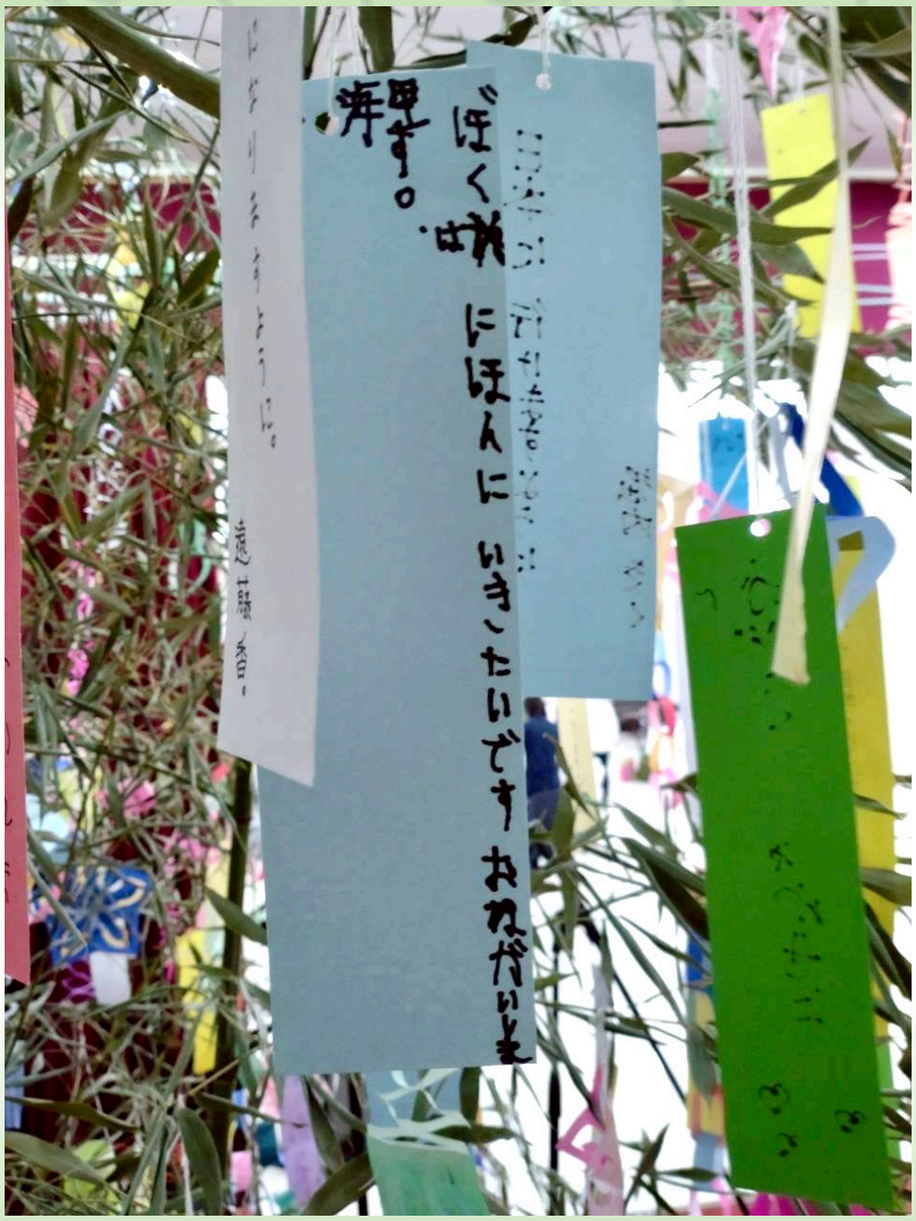
この木がつぶやきそうなことを
3つ書いてみよう

①

②

③

考えてみよう



私の願いごと

この短冊を書いた人は、
どんな人なんだろう？

次の文章につながるように、「海」さんの物語を書いてみよう

だから「海」さんは「日本に行きたい」と思うようになりました。